

第272回 今月読んだ本
福本和夫 思想の再解釈
—「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（25）

第11章 「日本ルネッサンス史論」以降—晩年の福本 (1970—1983)

福本は『日本ルネッサンス史論』執筆と平行して、異なるジャンルのさまざまな著作を執筆した。本章では、『日本ルネッサンス史論』完成以前に着手していた分野も含めて、1970年（76歳）から1983年（89歳で死去）までの著作を中心に論じていきたい。

1 毛沢東論

福本は中国革命を率いた毛沢東（1893—1976）に大きな関心を抱いていた。毛沢東は福本より1歳年上である。同じ革命を志した者として、しかもコミンテルン（スターリン）の路線から独立して革命を貫こうとした同時代人として毛沢東を同志として見做すのは当然である。

一つのエピソードが残されている。福本は日本で不慮の死を遂げた中国青年の記念碑を建立するために奔走した。

作曲家の聶耳（ニアール、ニエアル、1912—1935）は雲南省昆明市（現昆明市）の貧しい漢方医の家庭に生まれる。1930年に雲南省師範学校を卒業し、1933年に著名な劇作家である田漢（1898—1968、郭沫若の友人、文化大革命で獄死）の紹介で中国共産党に入党する。田漢ら左翼文化人が中国国民党に拘束される中、1935年4月18日、作曲の勉強のために日本滞在中の兄を頼って上海、長崎を経由して東京に着く。

聶耳は東京で抗日映画『風雲児女』（田漢の脚本）の主題歌を作曲する（歌詞は田漢）。「義勇軍行進曲」は全中国で歌われ、後に中華人民共和国の国歌となった。（この映画はウィキペディア「風雲児女」の項で全編89分を観ることができる。2026年4月17日閲覧。）

1935年7月9日、聶耳は湘南藤沢の知人宅に寄寓する。毎日のように鵜沼海岸に泳ぎに出かけた。7月17日、非常に波の高い日であった。沖の方へ泳いでいった聶耳の溺死体が上がった。

藤沢在住の福本は34の人民曲を遺して夭折した作曲家を弔い、そして顕彰するために、1951年、藤沢の日中友好協会（現湘南日中友好協会）設立準備会議の席上で記念碑の建立を提案する。1954年11月、鵜沼海岸で開催された記念碑除幕式では、福本が建立提案者として挨拶した。その後、郭沫若（1892—1978、

中国の近代文学・歴史学の開拓者の一人)、廖承志(1908-1983、知日派の政治家、中日友好会長)ら中国の要人たちが記念碑を訪れる。なお、『福本和夫著作集 第6巻 中国思想の位相論』(こぶし書房、2009年)所収の『毛沢東思想の原点』「附録6章」には、記念碑建立の経緯、福本による除幕式挨拶などが収録されている(716頁以下)。

福本の毛沢東論は『人間毛沢東』(日本出版協同、1954年、前掲『福本和夫著作集 第6巻』427-569頁、所収)、『毛沢東思想の原点』(三一書房、1973年、前掲571-732頁、所収)、『毛沢東思想の路線闘争—批林批孔の大衆運動の展開を中心に』(三一書房、1974年)がある。「批林批孔運動」とは「文化大革命」(1966-1976)中の1974年に起こった林彪(1907-1971、ソ連に亡命する途上で航空機墜落)と孔子の批判を主題とする政治闘争であり、批判の矛先は周恩来(1898-1976)に向かった。『毛沢東思想の路線闘争』は毛沢東その人を論じていないために、ここでは前2作を取り上げることとする。

『人間毛沢東』は中華人民共和国建国の5年後に刊行された。「序文—この人を見よ!」で「アジア第一等の人物」である「毛沢東の人間像を、できるだけ写實的に、描き出すことを主眼としたものであって、いわゆる政治的伝記を書こうとしたものではない」(前掲『福本和夫著作集 第6巻』433頁)と書くように、中国革命成功を喜ぶ福本の高揚感が伝わってくる。

各節のタイトル(各節タイトルに小見出しが続き、章立てにはなっていない)は、少年戦術家、学習と鍛錬、風貌と性格と嗜好、満々たる自信と八面六臂の才能、天衣無縫の書と詩、恋愛と家庭、危難と肅清、毛沢東路線を確立するまでの苦心、長征2万5千里、連合と闘争、孔明・魯迅・毛沢東、3つの問答—人民への絶対の信頼と若い世代への無私の愛情、となっている。

『毛沢東思想の原点』は文化大革命の最中に刊行された。内容は、第1部「毛沢東思想と先秦諸子百家」、第2部「毛沢東思想の発展と今後の課題」、第3部「天衣無縫の詩詞と書」、附録6章、となっている。第2部はリアルタイムで進行する文化大革命、中ソ対立などについての時事論になっている。当時の左翼文化人と同様に、福本は文化大革命を、中ソ対立では中国の立場を評価する。

中国の内情に関する情報はきわめて限られていた。農作物、鉄鋼製品の大増産命令による大飢饉で数千万人の犠牲者が出た「大躍進政策」(1958-1961、死者数は1500万~6000万といわれている)、政治的社会的に大きな犠牲と禍根を遺した文化大革命といった未曾有の失政について、福本が詳しく言及することはない。

なぜ、それほどまでに福本は毛沢東思想を称揚したか。『人間毛沢東』の次の一節は、毛沢東に対する羨望のまなざしがよく表現されている。少し長いが引用する。

なぜ、マルクス主義は、抽象的マルクス主義ではなくして、具体的マルクス主義でなければならぬか。マルクス主義は、元来、国際主義であるが、マルクス主義の実現は必ず、民族形式をとったマルクス主義、それが具体的なマルクス主義である。すなわち、マルクス主義を、それぞれ自分の国の具体的な環境のなかで、具体的に闘争することであり、抽象的、公式的に、それを、ただあてはめることではない。

毛沢東思想は、……マルクス・レーニン主義と中国革命の実践とを、統一した思想であり、中国の共産主義であり、中国のマルクス主義である。(中略) 中国の社会的、歴史的発展のきわめて大きな特殊性、中国の科学の未発達などの条件によって、マルクス主義を体系的に中国化し、ヨーロッパ的形態から中国的形態に変える、すなわち、マルクス主義の立場と、方法でもって、現代中国革命中の諸問題—これには、これまでの世界のマルクス主義者が提出したこともない多くの問題がふくまれる—それを解決しようとするのは、正に特殊な困難な事業である……。しかも、毛沢東思想は、それをみごとに成し遂げるのに成功したのである。

(前掲『福本和夫著作集 第6巻』499-500頁)

福本は、毛沢東がマルクス主義を中国化するために大規模な農村実態調査を行ったことに着目する。1927年から1934年まで各地の土地配分状況、土地貸付問題、土地闘争、富農問題、土地法などを調査して生活実態を把握した(福本による農林業の実地調査については本稿第9章第3・4節を参照)。そもそも普遍的調査(現代でいえば、例えば日本の国勢調査に代表される各種調査—岩田注)は当時の中国では現実的には不可能であった。役立つのは、たとえ部分的ではあっても具体的な実態調査であり、調査項目を絞った重点調査であろう。

……毛沢東は、かつて、農村調査について、いいことをいってくれている。「調査のない限り、(政策決定の—岩田補足)発言権はない。」というのだが、これはいいかえれば、公式主義の農業問題理論家や当てずっぽうの予言主義者やには、発言権はないということだ。

(前掲505頁)

『毛沢東思想の原点』の特徴は第3部「天衣無縫の詩詞と書」で文化人としての毛沢東を本格的に論じていることである。『日本ルネッサンス史論』で毛沢東の詩余（長短句）に言及した福本は、詩余「長沙」と蘇東坡（1037-1101）の「赤壁の賦」（1082年）を比較検討する。また、毛沢東の破格の書風について次のように述べている。

書は人なりで、書でもって人柄がよくわかるが、私はさらに書は体格なりで、書でもって体格さえ察せられるように思っている。（中略）毛主席の書は、せいが高くて、額がひろく、禿げあがっている風貌のように、どこかのんびりしている。ユーモラスなところがある。

（前掲714頁、575・576頁には毛沢東の書が掲載されている。）

福本は公式主義から離れて日本独自のマルクス主義を模索しようと試みたが、コミンテルンの粛清によって失脚する。マルクス主義を体系的に日本化することに失敗した福本が毛沢東思想に対して憧れに似た感情を抱くのは自然なことなのかもしれない。

今では、研究者以外に『実践論・矛盾論』（原書1937年、岩波文庫、1957年）、『毛沢東語録』（赤い表紙が有名、河出書房新社、1966年）を読む人はほとんどいないだろう。当時を知る者でなければ、毛沢東への思い入れは理解しがたいのではないか。

2 革命回想—福本は何を目指していたのか

1977年、インタープレスから『革命回想』3部作が刊行された。『革命回想—第1部 非合法時代』は『革命運動裸像—非合法時代の思い出』（1962年）を、『革命回想—第2部 昭和の大獄』（全16章）は『革命は楽しからずや—回顧録・霧笛篇』（全21篇、1952年）の縮小版を復刻したものである。『革命運動裸像』と『革命は楽しからずや』はそれぞれ『裸像』『霧笛』と略して本稿で引用してきた。

『革命回想—第3部 自主性・人間性の回復をめざして』（以下『自主性』）は『自主性・人間性の回復を目指して45年』（マルクス主義公論、1969年）を削除・追加したものであり、『福本和夫著作集 第10巻 自主性・人間性の回復をめざして』（こぶし書房、2010年）に所収されている（15-333頁）。なお、『裸像』『霧笛』は『著作集』では読むことはできない。

福本の政治的発言の場であった雑誌『マルクス主義公論』は1958年7月から1973年11月まで全28冊が発行される。『自主性』は1958年から1968年までの間に執筆された論考に1

977年の2章が追加された著作である（福本は通例、執筆年月日を明記する）。

読者は『自主性』に『裸像』や『霧笛』のような福本の個人的体験（裏話）を求めるだろう。しかし、その期待はみごとに裏切られる。福本の人となりを知ることはできないからである。

各章のタイトルを列挙してみよう。第1章「32テーゼならびに徳田主義の検討」（1958-1964）、第2章「生産協同組合論からみた本来のマルクス主義とレーニン主義—社会主義と生産協同組合」（1962-1964）、第3章「私の訳語「揚棄」・「端初」・「人間疎外」の半生物語」（1958-1968）、第4章「マルクス主義方法論の回顧と展望」（1960-1966）、第5章「西田哲学左派の検討」（1965-1966）、第6章「プロレタリア文化大革命に寄せて」（1967）、第7章「『マルクス主義公論』の自戒11個条」（1963）、第8章「日共リンチ事件の問題点」（1977）、第9章「附記その1、その2」（1977）。

32テーゼ、訳語「揚棄」「疎外」、三木清や戸坂潤ら西田哲学左派の批判、中国革命論など、なじみ深いテーマが並ぶ。

第7章「自戒11個条」では、プロレタリア国際主義は自主性の確立の上に打ち立てられること、スターリン主義の災厄から人間性の回復を図ること、公式主義や翻訳的な抽象談義は無用有害であること、少数意見を傾聴して少数派の留保権を尊重すること、スターリン主義批判を貫徹すること、マルクス主義にとって農林業問題はきわめて重要な意義をもつ一部門であること、等々といった従来の基本的スタンスを改めてまとめている。

第8章は「日本共産党スパイ査問事件」を論じる。1933年12月、日本共産党中央常任委員の宮本顕治、袴田里見らが特高のスパイと疑った2人の党員を査問（監禁、暴行）した際、そのうちの1人が外傷性ショックにより死亡して床下に埋められた事件である。この査問事件は立花隆『日本共産党の研究』（雑誌『文藝春秋』に1976年新年号から1977年12月号まで連載、本稿第7章、第8章第1節参照）などで詳しく取り上げられ、戦前左翼運動史ではよく知られている。ここでの福本の議論には目新しい点がない。『自主性』に第8章を追加したのは、『文藝春秋』連載記事が影響しているのではないか（もちろん福本は立花の名にも記事にも全く言及しない）。

日本ルネッサンス史論と日本マニフェアクチュア史論によって、江戸時代からブルジョア革命としての明治維新までの道筋はある程度は解明された。過去、すなわち近世から近代にかけての日本に関して饒舌な福本は、未来については口を閉ざす。「各人はその能力に応じて、各人はその必要に応じて」（マルクス『ゴータ綱領批判』1875年）のようなユートピアを語ってほしいわけではない。

自主性・人間性の回復を実現するためにどのような社会を目指していたのか。第2章（前掲『著作集 第10巻』77-156頁）の生産協同組合論は手がかりになる。福本の議論は行きつ戻りつしてわかりにくい。推測するしかない。

マルクス主義における協同組合（アソシエーション）論は長い伝統と研究の蓄積を有する。福本はマルクス主義、レーニン主義における協働組合論を検討する。マルクスやレーニンにとって協同組合は資本主義のすぐれた遺産であった。自由で平等な労働者は生産協同組合を組織することによって、資本家がいなくても大規模生産が可能になる。協同組合は社会主義の学校である。もちろん限界はある。協同組合が改良主義に囚われると社会主義への移行は不可能になるろう。

一切の生産手段も土地も国有化しなければならない。このような公式主義者の主張は無視してもよい。国有化と社会化を厳密に区別することが必要である。

福本は、社会主義と協同組合的生産様式を取り上げた『マルクス主義公論 第12号』（1962年7月）に対馬忠行（1901-1979、スターリンの存命中にスターリン主義批判を行う）が寄せた問題提起に対して、次のように回答している。

……貴説を拝見した印象では、社会化と国有化が同じ大きさの円周と考えられており、したがって全企業、全土地所有、全交通運輸機関、いずれも一度は国有化されることが必要と力説されているかにみえるが、我々はその点は少しちがいます。第1に、社会と国家とは同じ大きさの円周ではない。……国有化する必要のあるのは、主要生産手段、主要運輸交通手段等々に限り、小規模企業、小土地所有、小規模な交通運輸機関等々は、国有化されるべきではない。これらを国有化したら、中小企業や農民の大部分を味方にできない。敵にまわす結果となりこれはすこぶる危険である。 （前掲117頁）

社会化された自治的民主的に経営される協同組合は、将来の社会主義者社会のために労働者階級を教育・訓練する。福本は共同経営が自然発生的に拡大した例を挙げている。

群馬県を発祥地とする組合製糸と呼ばれる共同経営が埼玉・茨城・福島・長野・千葉・栃木の6県に波及し、1899年には組合員が数万人に上ったこと。1879年に始まった静岡県の製茶業の共同経営は、1916年の協同製茶工場11から1953年の583工場（共同経営参加戸数7827）へと発展し、自園自製（自作自営）戸数5355の約1.5倍になったこと。和紙の機械漉きでは丹後

二股村、大和丹生村、因幡青谷村などで共同経営を行っていること（以上、前掲104頁）。

1950年代には、既製服業、製餡業、袋豆腐製造業などの中小企業にも共同経営の動きがさかんに起こってきたこと。1960年代に入り、長崎の時計眼鏡協同組合（10軒加入）が400万円をかけて時計修理工場の新設を計画していること。東京杉並・世田谷のクリーニング業者15軒が城西洗染工業協同組合を設け、1963年12月から共同新工場が操業したこと。調布洗染業協同組合は6千万円をかけて敷地約2千平方メートルの新工場を建設したこと（以上、前掲154頁）。

公式主義を嫌悪する福本は、階級・人間疎外のない社会の到来、国家の消滅といった社会主義革命の完成態について語ることに禁欲的である。当面は何を目指すべきなのか。現実の人々の生活を常に見つめていた福本は、協同組合に実現すべき社会の萌芽を見出していたのである。

3 日本産業技術史と幸田露伴

最晩年の福本は、過去に書き溜めていた日本マニュファクチュア史論と日本ルネッサンス史論の番外編を発表する（本稿第10章第2節を参照）。『日本工業先覚者史話』（論創社、1981年、『福本和夫著作集 第7巻 カラクリ技術史 捕鯨史』423-600頁、所収）、『カラクリ技術史話』（フジ出版、1982年、1947年の完成原稿を刊行、前掲17-175頁、所収）である。

『カラクリ技術史話』は『日本ルネッサンス史論』第20章「カラクリ技術の復興と普及」を補完する。図版、写真、図表を数多く掲載した楽しい読み物である。竹田近江のカラクリ芝居、田中儀右衛門のカラクリ技術、名古屋祭の山車のからくり人形（馬琴、北斎が見物）、カラクリ見世物興行史などは予想される内容である。『カラクリ技術史話』の大きな特徴は、古代中国の荒唐無稽なカラクリ技術、江戸時代の飛行実験を紹介している点であろう。

周代（紀元前1046-紀元前256）の技術者である偃師^{えんし}は人造人間とともに穆王^{ぼく}（第5代）に謁見した。穆王は偃師の同伴者を人間だと疑わない。分解してみると、木や革を膠、漆で接着、着色したカラクリ人形だとわかる。五臓六腑も本物と見まごうほどである。しかも自動で動いたという。中国戦国時代（紀元前5世紀-紀元前256）の初期、魯の国に魯般という技術者がいた。3年をかけて木製のカササギ型の飛行機械を制作したところ、3日間、空を飛び続けた。

日本では、天明年間（1781-1789）に鳩の飛び方を研究した岡山の表具師幸吉が飛行したといわれている。幸吉と相前後し

て、三河の戸田太郎太夫は飛行実験で墜落し重傷を負う。寛政年間（1789-1809）にはカラスに倣った秋田の農夫が飛んだ記録が残っている。もちろん、これらは『日本ルネッサンス史論』には採録されていない。

『日本工業先覚者史話』は「日本マニュファクチュアの総合・比較研究」を副題にもつ『日本工業の黎明期』（1962年、第10章第2節参照）の続編として位置づけられる。

本書の目的は……日本近代工業すなわち機械的工場制が、明治の当初、どのような人びとによって、どのようにリードされて、成立しえたか。それら先人の経営と業績、その成功と失敗の由来をたずね、人物評伝を中心に、日本近代工業の主として成立の過程を、縦横に吟味し、そこから現在にも役立てるようできるだけ多くの教訓を引き出そうとするものである。

（前掲『著作集 第7巻』435頁）

1962年2月から6月まで『日本工業新聞』に120回にわたって連載された『日本工業開拓者列伝』ともいうべき本書は、経済政策論者、政策実施者、事業経営者の三要素を相互関連のもとに立体的に描こうとした野心的な試みである。

取り上げられた主な人物を列挙してみよう。大久保利通（1830-1878）、津田仙（1837-1908、農学者、津田梅子は娘）、前田正名（1850-1921、殖産興業政策を立案・実践）、福沢諭吉（1835-1901）、矢野文雄（1851-1931、ジャーナリスト、政治家）、渋沢栄一（1840-1931）、若山儀一（1840-1891、西洋経済学の先駆的な紹介者、保護貿易論を日本で初めて提唱）、ワグネル（1831-1892、陶磁器・ガラスなどの製造を指導、工業政策論・工業教育に尽力）、マイエット（1846-1920、経済学者、統計学者、大蔵省顧問などを歴任）、エッゲルト（1848-1893、経済学者、財政学者、マイエットとともに農業政策論を提唱）、田口卯吉（1855-1905、政治家、ジャーナリスト、実業家）、竹越与三郎（1865-1950、歴史家、思想史家、政治家）、大島貞益（1845-1914、経済評論家、保護貿易論者）、島津斉彬（1809-1858）、森有礼（1847-1889）、園田孝吉（1848-1923、外交官、実業家）、五大友厚（1836-1885）、岩崎弥太郎（1835-1885）、安田善次郎（1838-1921）。その他に、鉱山炭坑業の古河市兵衛（1832-1921、足尾銅山などを経営）、機械的工場制の開拓者である田中久重（1799-1881、カラクリ儀右衛門）、豊田佐吉（1867-1930）、近代造船業の川崎正蔵（1837-1912、川崎造船所（現川崎重工業）の創業者）、製紙業の大川平三郎（18

60-1936、王子製紙などを経営、日本の製紙王)、製糸業の片倉兼太郎(1850-1917、日本最大の製糸企業を創業)、水力発電による化学工業を朝鮮半島で興した野口遵(1873-1944、チッソを中核とする日窒コンツェルンの創業者)らに言及する。

『日本ルネッサンス史論から見た幸田露伴』(法政大学出版局、1972年)は、雑誌『北方文芸』(1941-1997、350号で終刊)に1970年2月から1971年9月にかけて18回連載した「異色の露伴論」(帯のキャッチコピー、全37章、附録5章)である。日本ルネッサンス史論と明治の文豪である幸田露伴(1867-1947、1937年に横山大観、長岡半太郎らとともに第1回文化勲章受章)の接点はどこにあるのか。

福本は「序文」で露伴論を執筆した理由を7つ挙げている。第1に、日本ルネッサンス期の代表的作家である西鶴と馬琴を自家薬籠中のものとして、そこから出発していること。第2に、1899年から1901年にかけて雑誌『新小説』に連載された「一国の首都」によって、露伴は日本の都市計画論の先駆者になったこと。第3に、鴉外の史伝物と露伴の史伝物(『頼朝』1908年、『太公望』1935年、『王羲之』1937年など)を比較検討できること。第4に、露伴の文芸復興論(元禄時代)と日本ルネッサンス史論を比較検討すること。第5に、権威・体制に対する態度、両大戦に賛成でなかった態度は他の作家、文学者より格段に立派であったこと。第6に、学問追究の仕方と見識が非常に優れていたこと。第7に、露伴の終焉が、作家・文学者として、一世の碩学としてまことに立派だったこと。

福本の晩年の共同研究者だった石見尚は、福本が82歳を迎えたある日の様子を回想する。

……炬燵で雑談しながら、「露伴は長寿の点でも大先輩だと遠くから眺めてきたが、自分もとうとうその年になり、いまでは大文豪より長生きしてしまった」と語ったことがあった。

自分の目標になる人物と出会えることは、人生にとって幸福である。福本の場合には、その目標は露伴であったように思う。かれにとって露伴は、先導者であったかもしれない。(前掲『福本和夫『日本ルネッサンス史論』をめぐる思想と人間』207頁)

『日本ルネッサンス史論から見た幸田露伴』は大先達への大いなるオマージュであった。

4 フクロウ、書、辞書

『日本ルネッサンス史論の補足・総括編』（1976年12月）を刊行した頃、福本は石見に「ルネッサンス研究で自分のやるべきことはほぼ完了したから、これからは随筆を書くことを主としたい」と語ったという（前掲251頁）。福本は82歳になっていた。「しかし83才からのちは、ものを書く体力はもういくばくも残っていなかった。」（前掲209頁）

1976年から1983年までの著作を復刻・新装版を除いて刊行順に並べると、『私の辞書論』（河出書房新社、1977年）、『書のたのしみ』（日本ルネッサンス研究所、1980年）、『日本工業先覚者史話』（1981年、前節参照）、『カラクリ技術史話』（1982年、前節参照）、『フクロウー私の探鼻記』（法政大学出版局、1982年）となる。『日本工業先覚者史話』は1962年の『日本工業新聞』連載稿、『カラクリ技術史話』は35年前に完成していた原稿の刊行、『フクロウー私の探鼻記』は2つの著作の合本、『書のたのしみ』は福本の手になる書を収録した46頁の小本である。また、『私の辞書論』「序文」の日付は1976年7月となっており、それ以降に執筆されたのは第2章第6節追記（9行）と巻末の追補（2頁）しかない。となると、この時期に新たに書き下ろされた本はない。かつて驚異的な執筆量を誇った福本には「ものを書く体力はもういくばくも残っていなかった」のである。

福本はフクロウを偏愛した。福本イズムや日本ルネッサンス史論はよく知らなくても、福本和夫といえは「フクロウのことを書いた人」と思っている人は多いかもしれない。

『フクロウ』（377頁）は、『史的唯物論者のみた鼻』（320頁、出版東京、1952年）と『鼻と人生』（150頁、マルクス主義公論、1969年）の重複を除いて図版を補い、若干の追補・訂正をして内容上の再編成を行った上でまとめた著作である。

冒頭に「フクロウへの愛情と正しい理解のために、わかりやすく、少年少女によんでもらえるように、書いたものである」とあるように、『史的唯物論者のみた鼻』は平易な文章と多くの図版でフクロウの科学的社会的文化的な側面を描き出していく。各章のタイトルは、Ⅰ「私は鼻を愛する（フクロウの思い出）」、Ⅱ「鼻の生態（種類、分布、形態、習性上の特徴など）」、Ⅲ「鼻の習性と用途」、Ⅳ「鼻の鳴き聲と鳴き方」、Ⅴ「鼻の方言と語源」、Ⅵ「鼻の外国語名と西洋人の鼻観」、Ⅶ「鼻と東西の民俗」、Ⅷ「鼻、木兎の玩具、装飾、看板、マークなど」、Ⅸ「鼻の彫刻」、Ⅹ「鼻と日本文学」、Ⅺ「鼻と中国文学」、Ⅻ「鼻と西洋文学」、ⅩⅢ「鼻と日本の絵画」、ⅩⅣ「鼻と西洋の絵画」、ⅩⅤ「鼻とピカソ（鼻の画家としてのピカソ）」となっている。

『梟と人生』はフクロウを題材にした絵画、彫刻、置物などの口絵写真12枚を収録した本文118頁の本である。各章タイトルは、第1章「梟の種類と分布」、第2章「梟の生態と習性」、第3章「梟の啼声の測定」、第4章「サケ・ツク・布久呂布の語源」、第5章「梟に対する見方の変遷」、第6章「梟の彫刻」、第7章「梟の絵画」、第8章「ドイツ・ルネッサンス文学の先駆「オイレン・シュピーゲル物語」－「いたずら先生一代記」－」、第9章「蜀山人のズク引きの賛文、その他」、第10章「梟をうたったアイヌの超長篇詩2篇」、第11章「白秋の木兎の家の跡を訪ねて、その他」、第12章「梟と東大総長－ホガースの銅版画白梟図を贈られて－」である。

合本した『フクロウ』の各章は、I「フクロウの種類と生態」、II「フクロウの鳴声と鳴方」、III「フクロウの方言と語源」、IV「東西のフクロウ観」、V「文学のなかのフクロウ」、VI「絵画・彫刻等のなかのフクロウ」となっている。前2作は稀覯本であり、フクロウについて詳しく知りたいときには、簡単に入手できる『フクロウ』を読むことをお薦めする。

『フクロウ』は好意的に受け容れられたようである。『福本和夫研究 第5集』（前掲、1983年）には、「フクロウのすべて”満載”生態、民俗、神話など、社会思想家福本和夫さん半世紀の研究を本に」（太田博、1983年1月23日付毎日新聞（朝刊）湘南版）、「あの「福本イズム」の老マルキスト福本和夫が書いた「探梟記」（横山政男、1983年3月4日付『週刊朝日』）、「「瑞」と「凶」をめぐる夢想の冒険」（倉本四郎、1983年3月11日付『週刊ポスト』）などが収録されている。

『フクロウ』は読者の興味関心に応じて多様な貌を見せる本である。印象的な箇所を挙げてみたい。

まずは、郷里でのゴロクトと母の思い出（第2章参照）。福本の心の原風景であろう。

むかし私の家は、下条といって村の一番しもはずれにあつて、屋敷にいろんな樹木がしげっており、かつ鎮守の森にも近かつたせいか、よくゴロクトの鳴くのを聞いたものである。私の郷里では、フクロウともミミヅクともいわず、ゴロクトと呼んでいた。

少年のころ、鎮守の森で、昼間のゴロクトをとらえて、家に2、3日飼っていたこともあった。小学生の終わりに近いころ、私は腸チフスのため、村の避病院で一夏をすごしたことがある。そのとき看護婦では心もとないといって母がきて、つきっきりで看病してくれたが、夜になるとよくゴロクトが鳴く

ので、それが淋しくてたまらなかった、とあとで母はよく述懐していた。ゴロクトを聞くと、私は今でも避病院での母のことをすぐ思い出す。
(『フクロウ』8頁)

大河内一男が福本にフクロウが描かれた銅版画を贈った話も忘れがたい。

『文藝春秋』1966年8月号に、福本は「私の鼻研究」と題する小文を寄稿した。編集部の依頼に応えたエッセイである。翌年4月、東京大学総長の大河内一男(1905-1984、経済学者)から『文藝春秋』1967年5月号とともに手紙が送られてきた。「名著発掘」という欄で『唯物論者の見た鼻』を取り上げたというのである。翌月には次のような趣旨の手紙が届く。

大学の部屋にはホガース(1697-1764)というイギリスの銅版画家の「完成された残酷」を飾っている。版画のなかにはフクロウが飛んでいる。昨年、ロンドン出張の際に、同じものがもう一点あることを画商から聞いた。その時注文したのが船便でようやく届いたのでお送りする。

福本と大河内との間に接点はない。わざわざロンドンの画商から取り寄せてくれた好意に、福本は大いに感激した。

福本のフクロウ・コレクションはよく知られていた。1977年10月には、藤沢の江ノ電デパートで「福本和夫ふくろう展」が開催された。フクロウの民芸品、工芸品、絵画、彫刻、玩具、剥製、頭蓋骨、アルコール漬けの眼、手水鉢のミミズクの拓本、福本が筆で描いた掛け軸、その他に資料、写真、書物など300余点のコレクションを出品した。さらに1980年10月には同じ会場で「書とふくろう展」が開催されている。



いままで揮毫してきた書をまとめてみてはどうか、という石見尚の提案がきっかけで成ったのが『書のたのしみ』で、19点の書が収録されている。「貴族風な王羲之派の書はきれいで、これに反対しておこった文人風の顔真卿の書がすきである。魅力をおぼえる。」(前掲8頁) 福本の書がどのようなものかは、右の写真でうかがい知ることができよう(上30頁、下31頁)。



『日本ルネッサンス史論』第36章「書体・書風の変遷と復古生新の法則」からわかるように、福本は書を本格的に研究した。その

成果が『書味真髓』（フジ出版、1968年、前掲『福本和夫著作集 第6巻』15-314頁、所収）である。100余りの書、印章、印譜、硯が写真版で収録され、その中にはマルクス、ロマン・ロラン（1866-1944）、ツヴァイク（1881-1942）らの書簡もある。王羲之（303-361）、顔真卿（709-785）、米元章（1051-1107）から毛沢東、西園寺公望（1849-1940）、犬養木堂（毅、1855-1932）、内藤湖南（1866-1934）、夏目漱石（1867-1916）まで実に多彩な人物を取り上げている。

各章のタイトルは、第1章「書の二大系統」、第2章「宋の四大書家」、第3章「明末・清初の書風」、第4章「日本ルネッサンス期における書風の革新」、第5章「幕末維新志士の書のうちから」、第6章「清代の碑学派と日本への影響」、第7章「外国著名人の書風」、第8章「明治・大正の書」、第9章「小楷の魅力」、第10章「印章と硯」、第11章「年表」、第12章「著者註」、追補「日本ルネッサンスの書家2、3について」「米元章の書における多様性・複雑性と復古生新—北斎の画業におけるそれと比較して」「孫過庭の『書譜』と姜堯章の『続書譜』」となっている。

在獄中の福本は『ブロックハウス百科事典』全17巻を故郷から送ってもらい、風船貼りの紙片のほかには雑役夫から入手した紙片に原稿を書き、分厚い辞書の背とじの隙間に隠して送り返した（第8章第4節参照）。辞書に対する熱い思いが結実したのが「辞書の百科全書」とでもいうべき『私の辞書論』（前掲『福本和夫著作集 第8巻』223-436頁、所収）である。

各章は、第1章「総説—辞書の辞典の変遷と発達」、第2章「辞書の愛好家であった紅葉・白秋・サルトルらの逸話」、第3章「節用集のいろいろ—そのはじまりから最後の『明治節用大全』まで」、第4章「日本ルネッサンス期の百科辞典」、第5章「日本の啓蒙思潮期における百科辞典」、第6章「日本資本主義の成立期における百科辞典」、第7章「大槻文彦氏の『言海』『大言海』と松岡静雄氏の『日本古語大辞典』」、第8章「文豪幸田露伴の辞典類と新村出博士の『広辞苑』」、第9章「^{アンジクロペディ}ディオ『百科全書』のよりよき理解のために」、第10章「簡野教授の『字源』と諸橋博士の『大漢和辞典』」、第11章「「梟」「鴨脚樹・公孫樹」の語釈」、第12章「吉田東伍博士の『大日本地名辞典』と矢田挿雲記者の『江戸から東京へ』の地・歴誌」、第13章「『康熙字典』以前の漢語字典と山形蟠桃の字書論」、第14章「字体の変化・乱れと統一」、第15章「語源究明のむずかしさ」、追補「『和魯通言比考』の著者橋耕斎の数奇なる生涯」である。

意外だったのは、第2章第4節「年少にてラールス百科辞典にし

たしんだサルトル」でサルトル（1905-1980）の自伝『言葉』（1963年）を取り上げていることである。福本の初期思想はルカーチ、コルシュの西欧マルクス主義に大きな影響を受けた。しかし、その後の福本はマルクス、レーニンらには言及しても、新しいマルクス主義を論じることはない。福本の著作からはサルトル、メルロ＝ポンティら西欧マルクス主義第2世代の著作を読んだ形跡はうかがえない。福本の蔵書にもサルトルの著作はない（『国立神奈川近代文学館所蔵文庫目録5 福本和夫文庫目録』1989年）。福本がサルトル『方法の問題』『弁証法的理性批判』（ともに1960年）における実存主義的マルクス主義をどう読むのか。「自主性・人間性の哲学」を提唱したサルトルと福本の主張が交叉すれば、いかなる哲学が生まれるのか。むろん夢に過ぎない。

フクロウ、書、辞書は日本ルネッサンス史論と一見関係がなさそうに見える。なぜ福本は全力で取り組んだのか。これらには古今東西の知見が不可欠である。実は、日本ルネッサンス史論という大河の支流を形成しているのである。

福本の膨大な著作群を読むとき、「勉強させていただいている」という気持ちになってくる。博覧強記ぶりに圧倒されるからである。もちろん、正坐の姿勢がふさわしい。

唯一の例外はフクロウ論である。

……私の著作中、およそこの本ほど、気楽に愉快的な気持ちで、たえず微笑をたたえながら、書きあげたものはない。それゆえに、私の愛情と熱情とは、全巻にみなぎっているはずである。

（前掲『フクロウ』5頁）

ソファーか畳に寝転び、時々居眠りをして「微笑をたたえながら」読みたくなる本である。